宮澤賢治「饑餓陣営」考

横山信幸

一

「饑餓陣営」[1]は奇妙な戯曲である。高橋康也氏は言う。

登場したバナナン大将が身につけているバナナの肩章や菓子の勲章を、ひもじい兵隊たちがつぎつぎとむしり取って食ってしまうこの場面ほど珍妙痛快な光景は、かつて（つまりイョネスコ以前）どんな劇作家も創りえなかったていのものだ。

（「不条理な祝祭劇」『ユリイカ』1977年9月臨時増刊）

兵士たちが大将の勲章を食ってしまうことが「珍妙」ならば、勲章を食われた大将が突如「生産体操」を発明し、しきりに果実を収めながら神を讃えるという出来事はもっと「珍妙」である、と言っていいだろう。

賢治の指導のもと、花巻農学校で三回[2]にわたって上演されたというこの奇妙な戯曲のテーマは何か。境忠一氏は次のように言う。

戦争否定という主題がユーモラスに歌われ、生産と労働のよろこびに昇華されている。

（『評伝　宮澤賢治』　桜楓社　昭五十年四月刊）

宮津博氏は次のように言う。

「饑餓陣営」では、人々が勲章をねらって戦争を起し、戦禍のためにいたずらに餓死を待つよりも、すみやかに戦争を中止して生産体操をやる方がよっぽど生きるために重要だ……と説く。

（「賢治の四篇の戯曲」『宮澤賢治研究Ⅰ』草野心平編　筑摩書房　昭三三年八月刊）

この戯曲を演じたことのある糸魚川あき氏は次のように言う。

……特にこの饑餓陣営は、戦争と云うものの悲惨さ、哀れさ、みじめさを強調し、生産の重要性を画いたものだと思います。（「饑餓陣営を上演して」『四次元』四五号）

三氏ともに、この戯曲のテーマを、「戦争否定」と「生産と労働のよろこび」としている。だが、「戦争否定」と、「生産と労働のよろこび」とは、どのような論理でつながれるのか。両者の間には、どのような内的連関があるのか。

羽鳥一英氏は次のように言う。

……この作品には、最初部下達が苦しんでいることも気づかぬような少々困った大将が出てくるが、その大将も間もなく改心し、戦争はやめて生産体操にきりかえるというわけで（略）

（「宮沢賢治の『バナナン大将』」『国語国文学報』第二五集　傍点―横山）

羽鳥氏は「大将も間もなく改心し」と述べている。だが、大将は何ゆえに「改心」したのか。「饑餓陣営」には次のように書かれているだけである。

バナナン大将「もうわかった。お前たちの心底は見届けた。お前たちの誠心に較べては、おれの勲章などは実に何でもないぢゃ。

おゝ神はほめられよ。実におん眼からみそなはすならば勲章やエポレットなどは瓦礫にも均しいぢゃ。」

大将の「改心」は唐突である。羽鳥氏は言う。

ただ末尾近く、果樹整枝法の生産体操に移るところが、脚本だけ読んでいたのでは、いささか急激すぎるし、教訓調でめざわりである。

（「宮沢賢治の『バナナン大将』」『前出』）

羽鳥氏の言うごとく、ドラマの前半部から後半部への転換は、「いささか急激すぎる」と思われる。また、「改心」の必然性についても、納得のいくように描かれているとは言いがたい。だが、「改心」の必然性が分からない、ということになると、この戯曲のテーマは、「戦争否定」と「生産と労働のよろこび」の二つに分裂したままだということになる。物語りには一貫したテーマはないのだろ

うか。

二

「饑餓陣営」のテーマについて、統橋達雄氏は次のように言う。

原作者の意図は、戦争反対ということよりもむしろ、生産活動――特に農業生産――への力強い讃歌にあるのではなかろうか。

（「『バナナン大将』を観て」『四次元』七八号）

また、長光太氏は次のように言う。

「饑餓陣営」はよくいわれる反戦を主題にしてはおらず、饑餓を主題とした喜劇であって、この饑餓こそは宮澤賢治の生涯の課題です。（略）「生産体操」のレヴュウ風のデモンストレエションのほうが、先に着想されたようです。

（「その系っこ大学画期と演劇への志向について」『宮澤賢治研究Ⅱ』草野心平編　筑摩書房　昭四四年八月刊）

統橋・長氏とも、「饑餓陣営」のテーマを「反戦」とする考え方には否定的である。

これに対し天沢退二郎氏は次のように言う。

極限状況の設定とユーモラスな展開とが巧妙にかみ合っていて、勲章という軍国主義的権威の象徴がコケにされているにも拘らず、反戦的主題にも露骨さはない。

（「解説」『新修宮沢賢治全集』第十四巻　筑摩書房　一九八〇年五月傍点―天沢）

「露骨さはない」と断ってはいるが、天沢氏は「反戦的主題」と捉えている。この戯曲のテーマを「戦争否定」とする解釈の極に、一九五六年八月、三越劇場で上演されたという劇団東童上演台本「バナナン大将」[3]がある。この台本では、「俺達は、明朝ただちに軍を引上げて戦争を中止する。」「そうじゃ、無益な殺りくなど、なんの益があろう。みんなくにへ帰って家業にいそしむのだ。それぞれの平和な生産に従事するのだ、わかったな！」という、バナナン大将のセリフが付け加えられる一方、果樹整枝法体操と大将による果実取穫、神への讃歌の場面は削除されている。つまり、原作「饑餓陣営」は、ここでは完全に戦争否定をテーマとした作品に書き換えられているのである。

この戯曲のテーマは、「生産のよろこび」にあるのか、それとも「戦争否定」にあるのか、あるいは、両方を統一止揚したところにあるのか。作品を貫く論理はどこにあるのだろうか。

三

「饑餓陣営」を論じた最も魅力的な論攷に、高橋康也氏の「不条理な祝祭劇」がある。高橋氏は言う。

兵士らが腕でつくった棚の下をくぐりながら、大将は手籠をもって「しきりに果実を収」め、こう言う――

実に立派ちゃ、この実はみな琥珀でつくってある。それでゐて……甘いつめたい汁でいっぱいぢゃ。（略）日光来りて葉緑を照徹すれば葉緑黄金を生ずるぢゃ。讃ふべきかな神よ。

これは紛れもなく大地の豊饒に対して捧げられた讃歌であり、神への感謝である。（略）不条理劇かと思えた芝居はかくして熱烈な祝祭劇として終るのだ――

（「不条理な祝祭劇」『前出』）

高橋氏はこの作品を、「大地の豊饒に対して捧げられた讃歌」「祝祭劇」として見ている。これは、作品の主題を「生産と労働のよろこび」とする論の延長線上にあると言っていいだろう。だが、氏の論の優れている所以は、大将の「改心」を、物語展開上の必然として捉えている点にある。作品前半部におけるバナナン大将の「帝国主義的」な性格と、後半部における神を讃える敬虔な姿との間には、どのようなつながりがあるのか。高橋氏は言う。

こうして見ると、主人公たちは悪党というよりは、神話的トリッタスターの面影をもった道化なのかもしれない。いや、シェイクスピアでは道化そのものが悪魔（サタン）の末裔たる悪党（ヴィラン）の血を受けているとすれば、宮沢賢治戯曲の主人公は、帝国主義・資本主義に寄生するれっきとした悪党であると同時に、窮極的には許されるべき道化でもあると考えるべきかもしれない。そして、この悪党＝道化の滑稽＝不条理な受難（逆にいえば懲罰・犠牲）をへて、宇宙的生命の統一と秩序が確認されるところに、「不条理演劇」とは異った、賢治戯曲の祝祭劇的パタンがある。

（「不条理な祝祭劇」『前出』）

高橋氏は物語りに一貫した主題を見ようとしている。つまり、道化（トリックスター）→受難→宇宙的生命の統一と秩序の確認、という「祝祭劇的パタン」を持った戯曲としてこの作品を解こうとしている。

もし、このような解釈が可能であるなら、この作品のテーマは、「反戦」と「生産のよろこび」とに二分されることはないであろう。戯曲「饑餓陣営」は、堅固な構造と、統一された主題をもった作品としてわたくしたちの眼前に現れてくるであろう。

「饑餓陣営」を一貫するテーマについて考えたい。

四

飢えた兵士たちは何を食ったのか。

大将の登場する場面は、次のように書かれている。

「いくさで死ぬならあきらめもするが
いまごろ飢ゑて死にたくはない
あゝたゞひときれこの世のなごりに
バナナかなにかを　食ひたいな。」
（共に倒る）（銅鑼）

バナナン大将登場。バナナのエポレットを飾り菓子の勲章を胸に満せり。

バナナン大将は、飢えた兵士たちが、「バナナかなにかを　食ひたいな。」と歌った途端登場する。兵士たちが食ったものは一体何であったのか。それは、ザラメや菓子でできた勲章であったと同時に、実はバナナン大将その人ではなかっただろうか。

フレイザーは言う。

その昔、スキト人では、食物が欠乏して来ると、王を幽閉するのが習慣となっていた。（略）ところで王は同時に大祭司であり、また食物を増殖させると信じられていたので、いったん饑餓に見舞われると民衆は彼を殺した。このようにして王は次々と殺害され、ついには誰も王の位につくことを欲しなくなり、ここに王朝は（南太平洋の珊瑚島の――横山注）没落してしまったのである。（略）朝鮮では雨が多すぎるか少なすぎるかで作物がみのらぬ場合には、必ず王が譴責されるのであった。ある人の言うところによれば王はその位からしりぞけられ、他の人の言うところでは殺されたようである。

（『金枝篇』㈠　永橋卓介訳　岩波文庫一九五一年三月刊）

勲章を剝奪され嚥下されるバナナン大将の姿に、わたくしたちは、譴責される王、民衆によって殺される王の姿を見ないだろうか。

大将のエポッレットは、次のようにして飲み下される。

大将「いかん、いかん、エポレットを壊しちゃいかん。」
特務曹長「いいえ、すぐ組み立てます。もう片っ方拝見いたしたいものであります。」
大将「ふん、あとですっかり組み立てるならまあよかろう。」
特務曹長「なるほど金無垢であります。すぐ組み立てます。」（一箇をちぎり曹長に渡す。以下之に倣ふ。各皮を剝く。）
大将。（愕く。）「あっいかんいかん。皮を剝いてはいかんぢゃ。」
特務曹長、「急ぎ呑み下せいおいっ。」（一同嚥下。）
大将（泣く。）「ああ情けない。犬め、畜生ども。泥人形ども、勲章をみんな食ひ居ったな。どうするか見ろ。情けない。うわあ。」
（泣く。）

剝かれ、ちぎられ、食われたのは、バナナン大将その人ではなかったか。大将の肩章を食うことは、大将を食うことの代償行為である。高橋氏の言う「神話的道化（トリックスター）」の受難とは、フレイザーの言う譴責される王に相当すると思われる。もし、バナナン大将の受難を、譴責される王の姿と解することが可能であるならば、作品前半部のテーマはそのまま後半部のそれと重なってくる。

王の死は、何ゆえに食物の豊饒となり得るのか。

五

M＝エリアーデは言う。

宇宙創成神話は、原初の巨人の儀礼的な死（すなわち非業の死）を含んでいる。つまりこの巨人の屍体から、世界がつくられ、草木などが生え出たのである。このような供犠と関係があるのは、とりわけ、植物、穀物の起源である。すでにみてきたように（略）、薬草、小麦、ぶどう、などは、「かのはじめの時」illotempore に、儀礼的に生贄にされた神話的人物の血と肉から芽生えたのであった。（略）人身供犠で、犠牲者の屍体を細分するのは、神話的人物の屍体が細分されて、種子に生命を与えたのと一致する。（「農耕

と豊饒の儀礼」『聖なる空間と時間』エリアーデ著作集3　せりか書房　一九八一年三月刊）

エリアーデの右のことばは、「饑餓陣営」のテーマをよく解き明かしている。部下たちによって食われるバナナン大将とは、「儀礼的に生贄にされた神話的人物」に他ならない。千切られ、剝かれ、食われる（「非業の死」）ことによって、バナナン大将は、「薬草、小麦、ぶどう」などを芽生えさせ、よく「種子に生命を与え」得たのである。[4]

バナナン大将の発明した生産体操と、

みさかえはあれ　かゞやきの
あめとしめりの　くろつちに

というバナナン大将の行進歌とは、大地の豊饒を願おうとする農耕民族の血の中から沸き出た、神と自然への讃歌であったと言えよう。

「饑餓陣営」は、軍国主義的象徴をコケにすることによって「戦争を否定」しようとした作品ではない。また、「生産の重要性」を教訓的に説いた作品でもない。それは、巨人の死（英雄の受難）による大地の豊饒を願った、始源的形態の演劇であった。

六

「饑餓陣営」の、演劇としての特徴について触れておきたい。

高橋康也氏は言う。

ここにはサテュロス劇の猥雑さとディニュソス劇の犠牲＝浄化が融合して存在し、最後にすべては音楽・舞踊・合唱の中で、宇宙への讃歌として終る。風変りな独自性をもってではあるが、そこに、演劇というものの根源的性格が鮮かに体現されている。

（「不条理な祝祭劇」『前出』）

「饑餓陣営」における「演劇というものの根源的性格」とは何か。もう少し詳しく検討してみたい。

古典ギリシャ演劇について、ギルバート・マリーは次のように述べている。

……演劇の両形態（悲劇と喜劇のこと―横山注）ともにその起源は宗教的儀礼にあったこと、そしてこの宗教的儀礼は、あるいは「年の霊」とか「生成の神」とか「生命の精」などと呼ばれ、いずれにせよ古代地中海の全域にわたってその宗教の核心となっていた神霊の崇拝と関連のあること、（略）ヘロドトスによれば、悲劇はディオニュソスの受難を表現しているのであり、またこのディオニュソスの受難なるものは、若干の細部の点以外は、オシリス（エジプトの神（ディ）のセトも同様）の受難と同一といってよいという。ところでオシリスは次の敵、ものみなを焼きつくすセトに斬り殺されたのであった。ちょうど穀物の束がちぎられて畑にまき散らされるように、無惨に切り刻まれ、幾月ものあいだ悼（いた）まれ空しく求められた後、新穀が春に芽を吹き初めるころ、新しい生命をもって蘇える姿が見出されるのである。悲劇は「年の精霊」の死の演技化、喜劇はその結婚、というよりむしろ結婚に伴う狂宴（コモス）の演技化なのである。

（「古典劇の伝統」　松平千秋訳　『ギリシア・ローマ古典劇集』　世界文学大系2　筑摩書房　一九五九年六月刊）

マリーは述べている。英雄はちぎられ、ばらまかれることによって、次の年の穀物の再生を約束する、と。[5] それが演劇の起源である、と。さらに言う。

……どうも歴史的には悲劇の主人公は、それをディオニュソスと呼ぼうと何と呼ぼうと、要するに「新しい年」のみのりをもって共同体を救うために訪れる「生命の霊」と、わが身に共同体のあらゆる罪を負って、死すべくあるいは荒野に彷徨すべく追放されるバルマコス、つまり身代り山羊（スケイプ・ゴウト）に相当するけがれた「古い年」との両方に由来しているらしいのである。

（「古典劇の伝統」『同前』）

演劇の起源という観点から言えば、バナナン大将とは、「『新しい年』のみのりをもって共同体を救うために訪れる『生命の霊』」であり、それはまた、「死すべくあるいは荒野に彷徨すべく追放されるバルマコス」でもある、ということになる。

このように解せば、大正期の日本の一農学校の教師が、生徒のために書き下した戯曲の中に、遥か時空を隔てたギリシャ古典劇の精神が脈々と流れていた、ということになる。それを可能にしたのは、大地と宇宙の運行の法則を、自らの生の法則とせんとした宮澤賢治という一個体の中に、古代地中海沿海の農耕の民の生きざまにも通じる、普遍的な生が抱え込まれていたからであろう。

大地の豊饒を讃えた戯曲「饑餓陣営」は、農学校開校式を記念して演じられる戯曲として、まことにふさわしい作品であったと言うことができる。

〔注〕

(1) 「饑餓陣営」は、「コミックオペレット　生産体操」と題された戯曲が改題されたものである。草稿表紙には、大正一一年六月二〇日の日付けがある。なお本文の引用は、「饑餓陣営」（『新修宮沢賢治全集』第十四巻　筑摩書房　一九八〇年五月刊）に拠った。

(2) 「年譜」（『校本宮澤賢治全集』第十四巻　筑摩書房　昭五二年十月刊）に拠ると、農学校では次の三回上演されている。一回目、大正一一年九月。二回目、大正一二年五月二五日。三回目、大正一三年八月一〇日～一一日。

(3) 「バナナン大将」劇団東童　第九八回公演上演台本　演出　青沼三朗『四次元』七三号所収

(4) フレイザーは次のようにも言っている。「王が呪術的な、あるいは超自然的な力をもち、その効験によって土地を豊饒にし、その他の福祉をもその民に与えることができるという信仰は、インドからアイルランドに至る全アーリア人の祖先たちによっても分け持たれていたらしく、その明らかな証拠を現代に至るまでわれわれ自身の国に残している。」（『金枝篇』㈠岩波文庫）

(5) 「饑餓陣営」のドラマは終始「古き穀倉の内部」で演じられていることに注目したい。また、バナナン大将が勲章を食われるのは、生命がこれから萌え出ようとする「四月の寒さ」の中においてであることも注目に価する。

（一九八三・七・七）